

表 1 対象症例 (1989.3.-1990.6.)

主 症 状	症 例 数 (穴の数)		
	当院ピアッシング	他院ピアッシング	合 計
感 染 症	356(510)	141(239)	497(749)
接触皮膚炎	527(886)	117(214)	644(1100)

結節のある症例は除外した。

表 2 合併症の分類 (1989.3.-1990.6.)

合 併 症	自験例*	衣笠ら ²⁾ 報告
感染症	497	18
接触皮膚炎	644	8
左右非対称	(検討せず)	6
閉 塞	23	2
金属アレルギー	17	0
結節形成	31	0
囊腫形成	8	0
耳垂裂傷	5	0
その他	3	1
合 計	1228 例	35 例

*症例の重複あり。
(他院ピアッシングを含む。)

シリコンリングのほうが、より柔らかく、穴を塞がないリング状構造をしているので、簡単に耳垂内の浸出物を手動的に揉み出すことができる。したがってドレーナージ効果はより著しいと考えられる。また装着したとき審美的にも十分満足感が得られるため穴の上皮化が完成するまで患者は喜んで装着してられる。すなわち合併症が治ったときには穴も完成しているのである。

最近ピアスと金属皮膚炎との関係を指摘する報告が増加している。Fischer ら⁶⁾は合成汗の中にピアスを1週間漬けておいた in vitro の実験の結果、ほとんどのピアスが金属アレルギーを引き起こすに十分なニッケルを放出したと述べている。Larsson-Stymne & Widström⁷⁾はスウェーデンでの女子学生 960 人の調査を行い、ピアスをしていない女性のニッケル感作率が1%であるのに対してピアスをしている女性の感作率は13%であったと報告している。また最近では従来少ないと言われていた金による接触皮膚炎の報告^{8,9)}も散

見されるようになってきた。

ピアッシングでは表皮を介さず直接軟部組織に金属を接触させることになるので指輪やネックレス等のアクセサリ以上に金属に感作される危険が高いといえる。今後ますますピアス愛好者は増加すると予想されるので、ピアッシングによる医原病としての金属アレルギーの増加が懸念されるところである。

金属アレルギーを伴わない単純な炎症性合併症は我々のシリコンリングで解決すると思われるが、金属アレルギー患者への対策は穴が完全に上皮化するまで金属を遠ざけることが肝要だと考えられる。我々は今回のピアス合併症の治療と平行して32例の希望者に対して最初のピアッシングにシリコンリングを使用し、全例何ら合併症を経験することなく1カ月後には穴の上皮化を確認した。我々のシリコンリングを用いるとピアッシングの際にも金属アレルギーを起こすことなく安全かつ確実に良好な穴をあけることが可能と考えられる。

なお本シリコンリングの試作は(株)カキヌマメディカルの厚意で完成した。

文 献

- 1) 王丸光一：日美外会誌 25：91, 1987
- 2) 衣笠哲雄，他：日美外報 8：20, 1988
- 3) 武藤靖雄：図説整容外科学，南山堂，東京，p 278, 1977
- 4) 伊藤正嗣：図説臨床形成外科講座第6巻，メジカルビュー社，東京，p 56, 1987
- 5) Zackowski DA：Plast Reconstr Surg 80：751, 1987
- 6) Fischer T et al：Contact Dermatitis 10：39, 1984
- 7) Larsson-Stymne B & Widström L：Contact Dermatitis 13：289, 1985
- 8) 原田昭太郎：皮膚病診療 6：607, 1984
- 9) 秋元佳代子，他：臨皮 44：671, 1990